

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

- ▶ 連用修飾成分における「デ」の二、三の問題—付帯状況と原因デ格を中心に—

doi:10.29714/TKJJ.200003.0006

淡江日本論叢, (9), 2000

作者/Author: 黃憲堂

頁數/Page: 109-125

出版日期/Publication Date: 2000/03

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200003.0006>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼 (Digital Object Identifier, DOI) 的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



airiti

連用修飾成分における「デ」の二、三の問題 ——付帶狀況と原因デ格を中心に——

淡江大學日本語文學系
副教授 黃 憲堂

【中文摘要】

日文的格助詞之中，以「デ」的功能最爲多樣化，分類的基準也最難以確定。因此學習者在進入中級階段之後，特別是對於表示《狀況》及《原因・理由》的「デ」，往往會有束手無策之感。

誤用的發生，往往來自於各類型境界線的不明確，而語言的各項規則及分類，又經常會有重疊的部分。若能找出一些線索，將重疊連續之處重新給予定位，定能減少部分誤用。

本文針對學習者誤用最多的：i) 表示《附帶狀況》的「デ」 ii) 「Nデイル」形與「Nデアル」形 iii) 表示《原因・理由》的「デ」，等問題點提出幾項看法，藉以區辨種種「デ」格意義的不同。並從語義學及構文論的觀點，分析句中的動詞與「デ」格補語的關係，設定一些可以合理解釋「デ」格的模式。

【キーワード】

付帶狀況 デ格 「Nデイル」 物理的因果關係 論理的因果關係

連用修飾成分における「デ」の二、三の問題

——付帯状況と原因デ格を中心に——

淡江大学日本語文学系

副教授 黄 憲堂

0 はじめに

格助詞「デ」は様々な意味を表わし、しかもその意味が連続していて、解釈に際してはコンテキストによって左右されることが多い。その上、他の助詞（特にニ）との意味役割の分担が曖昧であり、使い分けの規則がはっきりしない場合も少なくない。日本語教育の場で、特に中級に入ってから、「デ」の使い方一つを習得させるだけで、予定の時間数を大幅に超過する羽目になりかねない。学習者の度重なる質問をまとめてみると、理解できないのは、デ格の用法のほんの一部分に過ぎないことが分かる。

辞書や文法書などに当たってみると、「デ」は少なくとも次のような使い方があるとされる⁽¹⁾。

- | | |
|----------------------|----------------|
| ① 動作・作用の行われる場所を表す | 「デパートで買い物をする」 |
| ② 動作・作用が行われる時を表す | 「十分間で教えてください」 |
| ③ 動作・作用を行う時の事情・状況を表す | 「はらぺこで帰ってくる」 |
| ④ 手段・方法、または道具・材料を表す | 「ペンで書く」「汽車で行く」 |
| ⑤ 原因・理由・動機を表す | 「火事で一文なしになる」 |
| ⑥ 動作・状態の主体を表す | 「委員会で作成した原案」 |

その中で、①動作の場所、②動作の時間、④手段・方法・道具・材料などの三類は、ほぼ問題なく使えるようで、⑥のいわゆる「デ格主語」はやや独特なものではあるが、その名詞の選択制限に二、三条件を与えれば、それほど抵抗を見せずに習得できるのが普通である。結局、学習者として特に戸惑いを感じる問題の箇所は、③事情・状況、⑤原因・理由・動機を表わす二類だけになる。

ごく直観的に見て、問題の③と⑤のデ格名詞は、他の各類のそれと異なり、どちらかと言えば、具体性を欠いた状態や出来事を表わすものが多いということに気付くであろう。

このような名詞群の共通した性質が学習者の困惑にもつながっているだろうとは思いますが、問題はそれだけではないような気がする。というのは、デ格でマークされる格範疇が微妙に重なり合い、はっきりした境界線が引けないので、そこで述語動詞の性質やその動詞に関連する名詞の意味特徴などをはっきりさせない限り、格解釈への手がかりをつかむことができないと予期しているからである。

なお次の(1)のような、形態的にも意味的にも特別な説明を要する用法があるが、上の分類法の枠内には納まりにくいと思われる。そして、(2)と(3)における a と b の解釈や使い分けなども、学習者が首をかしげるような問題である。

- (1) a. 私はそれまでに、ほぼ人生と現実というものの仕組みを、自分なりに理解しているつもりでいた。(『風に吹かれて』五木寛之)
- b. 何しろ私がいつまで社長でいるかも分からないのよ。(『女社長に乾杯!』赤川次郎)
- (2) a. 元気でやっているのだろうか、このところ手紙があまりこないが、忙しいせいなのだろうか。(『人民は弱し官吏は強し』星新一)
- b. かぜが直ったばかりだというのが相変らずの声、元気にやっている父。(『二十歳の原点』高野悦子)
- (3) a. 亭主が病気で入院しているとか言っていたな。(『冬の旅』立原正秋)
- b. お父つあんが病気なので、二三日おきに時ちゃんのところへ裏口から金を取りに来た。(『放浪記』林芙美子)

上掲の(1)の「Nデイル」形は、生産性の高い形式であるが、それが使用される語彙的、統語的条件はあるのだろうか。また(2)の「元気デヤッテイル」と「元気ニヤッテイル」、(3)の原因を表わす「病気デ」と「病気ナノデ」では、意味的に違いがあるのか、なども含めて考えなければならないと思う。

この小稿では、筆者が学習者から質問を受けた問題点の中で、特に「デ」と関連のあるものだけを取り上げて考えていきたいと思う。概略次のように分ける。

1. 連用修飾成分の付帯状況表現
2. 「Nデイル」形と「Nデアル」形
3. 原因・理由・動機の「デ」

1 付帯状況

前に触れた『大辞林』の分類の③に挙げられている「動作・作用を行う時の事情・状況」という項目だが、その例文「はらぺこで帰ってくる」や「挨拶のつもりで声をかけたのだ」などから察すれば、事情・状況とは、動作・作用を行なう際の主体に付随している状態・態度・立場などの付帯状況を指すものと見受けられる。デ格で動作時の付帯状況を表わすことができるからには、そのデ格名詞が状態性を有することが予測できるのだが、その状態性は、本来主体側のものでありながら、場合によっては、述語動詞にも何らかの形でかかっているのである。

文中で主体の付帯状況を表わす副詞節が多いが⁽²⁾、本稿ではデ格を取ったものだけを問題にする。

1.1 「デ」と「ニ」の制限

主体の一側面を示す付帯状況のデ格名詞は、普通主体の心理的なしい身体的状態・態度・立場などを表わしうる。自立語として使うこともあるが、他の連体修飾成分がないと使えないものも多い。

- (4) a. 指圧そのものを大橋さんも本気で勉強した。(天声人語 1991.12.23)
- b. 恐らくナオミ自身にしたって、あの頃はただ何事も夢中で過したと云うだけでしょ。(『痴人の愛』谷崎潤一郎)
- c. なぜ、そんなふうには、黙ったままで行ってしまうんだ？(『砂の女』阿部公房)

上の(4) a b の「本気デ」「夢中デ」は単独で主体の内面的な状態を表わし、c の「ママ」は自立できない形式名詞であるが、「黙ッタママデ」で主体の外面的な状態を表わしている。この種のものには他にもたくさんあるが、一応次のように分けておく。(「…」は連体修飾成分が必要なものを示す)

i) 内面的な状態：

- a. 元気* 本気* 正気* 平気^(*) 夢中* 必死* 命懸け 意気込み 上の空 半信半疑
- b. …つもり …覚悟 …気持ち …気分 …感覚 …思い …考え …心境 …心地

ii) 外面的な状態：

- a. 裸 素っ裸 全裸 半裸 寝巻 喪服 和服姿 無言 素面(しらふ)
- b. …顔 …姿 …恰好 …状態 …態度 …調子 …表情 …様子 …構え …姿勢

上の i) ii) の a が自立できるもので、b は他の修飾語や限定語がないと使えないものである。これらが文中で付帯状況として解釈されるとき、普通「デ」を取るのだが、i) a の右肩にアスタリスク「*」が付いたものだけが、「ニ」を取ることもできる。中でも、次の(5) b のような「元気ニ」の使用頻度が高く、「元気で」との使い分けがあるようである。

- (5) a. 暑さにまけず元気で過ごしておりますからご安心ください。(『塩狩峠』三浦綾子)
- b. 元気に動きまわる人ほど毒素の作用を受け易い。(『黒い雨』井伏鱒二)
- c. その日の朝まで娘が元気に暮らしていた部屋で、父と母は泣いた。(朝日社説 1999. 10. 16)

「デ」と「ニ」とを両方取りうる付帯状況語の、使い分けの規則はまだよく分らないが、語彙ごとに規則が異なるようである。例えば、(5)の「元気デ」と「元気ニ」は、その後の動詞の性質により決まるのではないかと考えられる。(5) a の「過ゴス」のような長時間の持続性のものは「デ」が取られ、一方(5) b の「動きまわる」のように、短時間の動作性のものになると、「ニ」が取られやすい、という傾向があるが、持続する時間の長短、動作性の強弱などは相対的なものだから、厳密に二分することはできない。(5) c のような用例を中間的なものと見るべきであろう。

i) a の「本気」以下の語例は、「デ」の使用がずっと優勢だが、まれに「ニ」を取ることもある。その意味的な差異を一般化することは、今のところ、困難である。動詞と状況表現とのかかわり合いの問題だけでなく、文体差や個人差も絡んでいるようで(例えば、夏目漱石の作品に「平気ニ」はたくさん出る)、ここでは、深入りしないことにする。ただし、状態性(形容動詞になりうる語例を状態性が強いと見る)の強い語ほど、「ニ」が取りやすい、複合成分の場合、「ニ」が取りにくい、というかたよりがあると指摘しておきたい。

1.2 「デ」と「ニ」の係り方と意味解釈

時枝(1978: 155-156)では、陳述性が認められることで、「私は健康で働いてみます」「元気に、愉快地、働いてゐる」の中の「デ」と「ニ」は、助詞ではなく、助動詞「ダ」の連用形だと主張し⁽⁹⁾、これらの使い方を「連用修飾的陳述を表はす」と考える。もっともな指摘だと思う。

時枝の説に沿って拡張解釈していけば、前節の i) a のアスタリスク付きの「元気」「本気」などの語例に「デ」と「ニ」とが両方付く原因も次のように説明できる。つまり、「元気ダ」「本気ダ」は、それぞれ《名詞＋指定助動詞ダ》と《形容動詞》という二面性を持ち、同形の終止形から、二通りの連用形「元気デ／ニ」「本気デ／ニ」に変わったものだと、まず考えられるのである。一方、i) a の後半と b 及び ii) a b のものは、《形容動詞》として使えないため、「デ」しか取れないのである。

ここで問題になっている「デ」と「ニ」の使い分けを厳密に一般化するのは難しいと、すでに述べたのだが、特定の語例によっては、多少違いが感じられる場合もある。

(6) a. 父は元気で歌を歌っている。

b. 父は元気に歌を歌っている。

(6) a の「元気デ」は「父」の恒常的な性質・状態と考えられやすいが、b の「元気ニ」は、「歌ウ」動作の様態と解釈されるのが普通であろう。つまり、文中における要素との係り方から見れば、「デ」は主体名詞と呼応して半ば述語のはたらきをしている感があり、「ニ」は動詞の表わす動作の様態などを直接限定したり、修飾したりしているように感じられる。これと関連して、a 文は例えば「カラオケ好きの父が(毎日)歌っている」ということを連想させるが、b 文はそういう読みの可能性が少なくなり、単にある特定の場面で「父が元気よく歌っている」というふうに解釈されやすい。

また、次の二文も「親切デ」と「親切ニ」の係り方が異なるため、まったく違う解釈になってしまう。

(7) a. 彼には京造のことばが、――あわれんで言っているのか、親切で言ってくれてるのか、よく、のみこめなかった。(『路傍の石』山本有三)

b. さいわいに伊勢屋の忠助さんが親切に言ってくれるし…。(『路傍の石』山本有三)

「言ウ」という動作の様態を修飾するなら、一般には(7) b のように「親切ニ」を使うが、a 文のように「親切デ」にすると、動詞への修飾関係が薄れて、主体の状況説明になる。したがって、a は物の言い方に関して評価するのではなく、「主体の親切から、言ってくれる」のであって、b は「主体が親切な言い方をする」のである。その係り方を図式的に次の(8)のように示すことができる。

(8) a. [Aが親切]で言う

b. Aが[親切に言う]

- c. [Aが親切] で [言わない]
- d. Aが [親切に言わ] ない

(8) c d の否定表現を見れば分かるように、c では否定のスコープが「親切(デ)」に及ばないが、d の「親切(ニ)」が否定のスコープ内に入っている。したがって、(8) c では、「言ワナイ」という態度を取るから、「親切」だと評されるのだが、(8) d になると、「親切な物の言い方」をしないということになる。

ついでに触れることだが、「無条件」「冗談」「(久し)ぶり」「(金)なし」などのような語例が連用修飾成分として使われる時も、「デ」と「ニ」の両方を取りうる。これらは主体の付帯状況と性質が異なり、格解釈の上では違いがあるかも知れないが、例えば、「Aは無条件 ニ/デ 協力する」のように、結果的には意味の違いがほとんど感じられない。

2 「Nデイル」

主体の付帯状況になる「Nデ」は、もう一つ特別な使い方がある。前述した「1.1」の節に挙げた四種類の主体状況表現に対応して用例を掲げておく。

- (9) a. 桃子の友達たちは元気でいるか？ (『楡家の人びと』北杜夫) 【i）a】
- b. その成功のために、また当事者の努力にこたえ、負担を軽減するために可能な支援を行うつもりでいる。(読売社説 1996.6.2) 【i）b】
- c. 裸でいる訳にはいかない以上、何かを着なければならぬのだし… (『太郎物語』曾野綾子) 【ii）a】
- d. 加藤は、きつい眼をして花子を睨んだが、困った顔でいる花子を見る。(『孤高の人』新田次郎) 【ii）b】

上の四種類の状態性を有しているものの他に、「Nデイル」の形を取るものが多い。

- (10) a. あれは私が社長でいる間に起こった事件ですから、最終的な責任はこの私にあります。(『女社長に乾杯!』赤川次郎)
- b. 与党でいるのと野党に転じると、参院選ではどちらが得か。(朝日社説 1998.5.31)
- c. 一国だけが超大国でいることはできない。(天声人語 1997.12.28)

(10) b c の「与党」「超大国」のような人間の集合名詞は擬人的な用法と考えると問題にしないが、a の「社長」のような身分・地位を表わす名詞がよく「Nデイル」を取るので、ここで上述の四類の他に、さらにiii) の一類を設けることができる。

iii) 身分・関係を表わすもの

身分：社長 重役 議員 学長 貴婦人 …

関係：友達 親友 兄弟 親子 (いい)仲 …

2.1 「Nデイル」と「Nデアル」

「Nデイル」の形は、主体(有生名詞、特に人間)が、ある状態・身分(地位)や相互関係にあることを表わす。いくつかの特別な場合を除いて、「デアル(ダ)」に置き換えることができる。

- (11) a. Aは元気である。 (=Aは元気 である/だ)
b. Aは社長である。 (=Aは社長 である/だ)
c. AとBは友達である。(=AとBは友達 である/だ)

上の例で分かるように、文末の「Nデイル」は結果的に「Nデアル」とほぼ同義になることが多い。もっと厳密にいうなら、主体の性質・属性の一般的な判断や説明をする時、「デアル」が使われるが、一方、主体が特定の時点において、ある状態を持続して保っている、またはある身分・関係に位置付けられていることを強調する時、「デイル」を使うという微妙なニュアンスが感じられる。そのため、特別な文脈がなければ、「デイル」よりも「デアル」の方が自然な場合もある。

また、(12) a のように「デイル」の否定形「デイナイ」が文末述語に立つと不自然な表現になる。そういう時、やはり「デアル」の否定形「デ(は)ナイ」にする必要がある。ただし、b 文のような条件節内の「デイナイ」は許される。

- (12) a. *Aは 元気/社長 でない。(⇒ Aは 元気/社長 で(は)ない。)
b. トップがいつもそんな毅然とした姿勢でないと、会社は不正に付け込まれる。(朝日社説 1998.6.27)

2.2 置き換えられない「Nデイル」

以下、「デアル」で置き換えられない場合の「デイル」を考えてみよう。そもそもこの両形式の連語の違いは、その補助動詞「アル」と「イル」の違いの延長にあるものと考えべきであろう。「イル」が有生名詞の存在を表わす場合に使うという制限は、「デイル」形になっても、そのまま有効である⁽⁴⁾。なお、その有生性と関連してか、「イル」は、「アル」の果せないいくつかの機能を持っているのである。例えば、主体の意図・意志・希望

や命令などのムード的な表現、及び可能表現は、状態動詞「アル」の性質上、できない機能である。このような「アル」の機能上の欠如は、連語「デアル」のレベルでも変わらないので、そういった表現が必要になった場合、「デイル」をその補完的な形式として使わざるを得ない。

(13) a. あたしはあなたのまえではかわいそうな病人でいるほかなかったのです。

（『聖少女』倉橋由美子）【意図】

b. お友達でいようって、あなたがおっしゃったじゃないの。（『雪国』川端康成）

【意志】

現代語では、「デアル」は意図・作為などを表わすことができないから、(13) a の「病人デイル」を「病人デアル」にすると、「カワイソウナ病人」らしく見せかけるという解釈ができなくなり、不自然な文になってしまうであろう。また、「デアロウ」は意志ではなく、推量を表わすので、(13) b の「デイヨウ」を「デアロウ」に換えると、全く違った意味になってしまう。

次の(14) a の「デアリタイ」と b の「デアレ」などの希望形と命令形は、形式張った書き言葉的な表現で、日常生活ではあまり使用しないと思う。やはり「デイル」の変化形「デイタイ」と「デイロ」を使うのが普通であろう。

(14) a. 子供と向き合って、非行の芽にも善悪の区別を説く親でありたい。（読売社説 1998. 6. 24）【⇒でいたい 希望】

b. 幸福であれと彼は心に祈った。（『友情』武者小路実篤）【⇒でいろ 命令】

「アル」が可能形を持たないから、(15) a のように「デイレレル」が使われるが、(15) b の「デアリウル」を書き言葉的な表現として使うこともある。

(15) a. しかしよく平気でいられるね（『金閣寺』三島由紀夫）【可能】

b. 私たちがどれほど謙虚でありうるかという根源的なことを問いかけている。

（天声人語 1987. 1. 1）【=でいられる 可能】

以上述べたことで分かるように、「Nデイル」は「Nデアル」の文法的機能の不足を補い、一種の補完形式として使われるのである。付帯状況の場合と違って、「Nデ」と「イル」は固定化し、全体で一つのまとまりとなつて、「イル」に本来ある《ニ格場所名詞》の要求が弱くなり、否定形式の接続の機能もほとんど消えている。

3 原因・理由・動機の「デ」

学習者が原因・理由・動機の「デ」が特に理解しにくいことは、本稿の冒頭に述べたが、その原因は、「デ」を《原因・理由・動機》と解釈しうる条件が他の解釈の条件と微妙に重なり合うというところにあると思う。

まず、動作時の事情・状況と原因・理由の違いについて述べる。

文中では単なる事象の羅列でも、両方の事象の性質から因果関係を表わすと解釈されることがある。二つの事象の性質によって動機づけられ、経験論的に前の事象を後の事象の誘因と見なすことが出来るからである。例えば、「雨降って地固まる」のように、接続助詞「テ」を介して一つの文になった場合、「雨降る」と「地固まる」とが単なる並列の関係にある(いわゆる中止形)と解釈することが、もちろん出来るのだが、一般的な社会通念の支えさえあれば、前項を後項の原因と考えても決して不自然ではない。同じことは「デ」の場合でも言える。

鈴木(1972: 110)では、デ格名詞を原因・理由と解釈する際、述語には次のような制約があると言っている。

「述語は主として自然現象(おお水で家が流される)、生理現象(病気でねている)、社会現象(国鉄ストで交通がマヒした)をあらわすものにかぎられるようである。」

「デ」でマークされた名詞の制約に関しては触れていないが、これらの現象の生起と何らかの関連がなければならぬと想像される。なお、城田(1993: 78)では、「デは…動詞や名詞の具体的語義という荷物から解放されておらず、きわめて語彙的」と指摘している。まさにこの述語と名詞の語彙的ないし意味的な依存度が高いため、「デ」の格としての影が薄くなるのも肯けることである。

次の(16) a は原因としても、単なる中止や付帯状況としても解釈できるが、(16) b は「寝ている」という生理現象のせい(または、「病気」と「寝る」の関連性のせい)、原因・理由の解釈が有力である。

- (16) a. 私の家内は子供の安否が心配で、今すぐ広島へ帰りたがっています。(『黒い雨』井伏鱒二)
- b. 女房が病気で寝ていることなどは——うっかりとこちらが頭から信用してしまいそうなことだった。(『点と線』松本清張)

「デ」の解釈の曖昧性は、状況や原因に限って起こる現象ではない。田中章夫(1977: 375)

が指摘しているように、「塩は()デ作られる」の()内には、「工場」「電気」「海水」などが入りうる。入る名詞の性質の違いによって、格範疇が異なり、それぞれ場所格・方法格・材料格などとなる。言い換えれば、限りなく文脈の影響を取り除いていくと、「デ」自体の持つ意味が透明に近い無色のものになると言える⁽⁵⁾。このような透明性にもかかわらず、実際の発話の中で、補語名詞と述語動詞の性質からしかるべき色付けが出来れば、その格関係が限定されるが、与えられた文脈の情報が足りなければ、関係の限定が曖昧なままで、多義的な解釈の可能性が残る。だから、論理関係の明確さを要する場合、「講演とか論文などで、デが避けられる」(田中章夫 1977 : 376)というのも、このデの透明性に起因するのであろう。

3.1 原因・理由の「Nデ」と「Nナノデ」

「ノデ」という形式もデ格と同じように、場合によっては多義的な解釈ができる。(17)の二文とも、二通りに解釈されうることは、デ格の場合と平行している。ノデの「ノ」を用言成分を体言化するマーカーと考えるなら、多義解釈の説明をデ格に還元することができる。つまり、体言化の手順を経た「家族が多いの」「電車が遅れたの」全体に「デ」が付いたものと考えれば、あとは前述した「デ」の透明性にその二義性を求めることである。結局、問題の「ノデ」が接続助詞か連語かの認定も解釈の如何にかかわる問題で、最終的には意味論の問題になる。

(17) a. 家族が多いので、出費もたいへんだ。

b. 電車が遅れたので、遅刻しました。

ここの例に挙げた「ノデ」は、用言に後接したものだから、「ノ」を体言化のマーカーと考えられるのだが、直接名詞句に続く「デ」と「(ナ)ノデ」の用法を比較してみよう。

(18) a. 私の家内は子供の安否が心配で、今すぐ広島へ帰りたがっています。(= (4) a)

b. 悪いこととは知りながら、あまり健のことが心配なので、健のいないとき、こっそり、健の日記を読んでいました。(『孤高の人』新田次郎)

(18)で分かるように、この文脈では「心配デ」と「心配ナノデ」を入れ替えても、意味はほとんど変わらない。しいて言うなら、原因・理由の読みに関しては、a は聞き手まかせで、b の方は話し手が自らその因果関係を表出しているということが言えるかも知れない。

ところが、同じ因果関係として考えられる場合でも、「Nデ」と「Nナノデ」の置き換

えができない場合が多い。例えば、(19)の a と b では「デ」と「ナノデ」両方とも使えるが、(19)の c d になると、「ナノデ」は不自然である。意味的には、確かに「借金」が「首ガ回ラナイ」の原因で、「火事」が「家ガ焼ケタ」の原因になりうるのである。しかし、原因の読みとして「デ」の使用が許されるのに、「ナノデ」が許されないのである。(ここでは、「(ナ)ノデ」と「(ダ)カラ」の違いを無視する。以下、「(ナ)ノデ」を、原因・理由を表わす接続助詞の代表として取り上げる)

- (19) a. Aは病気 で / なので 寝ている。
b. 強い光 で / なので 眼が疲れた。
c. Aは借金 で / *なので 首が回らない。
d. 火事 で / *なので 家が焼けた。

意味的には因果関係が十分に成り立つはずの文脈であるが、「ナノデ」だけが使えないのは、なぜであろうか。この二種類の形式が表わす因果関係にはどういう違いがあるのか。次節でその違いと統語論的な制限を考えてみたい。

3.2 「Nデ」が原因格と解釈される条件

山梨(1993 : 49-51)では、認知と格解釈の項目で、特にデの表わす具格と原因格の解釈のゆれを問題にしている。氏によれば、この二つの格の解釈のゆれは「解釈する主体の視点のおきかたによって相対的に決められる」ものだと言うのであるが、その「格解釈の認知的スケール」の図式の中で、典型的な原因格として「ガンで死ぬ」が挙げられている。そして、原因格のプロトタイプの中に、デ格名詞が「具象的なものでない」「内在的力が存在する」という意味素性を挙げている⁽⁶⁾。

森田(1980 : 326)も原因を表わす例として「ガスで死んだ」を挙げ、「死ヌ」の意志性がない場合のみ、デ格名詞を原因と解釈されうると主張している⁽⁷⁾。

両氏とも「死ヌ」という動詞を因果関係の「果」(後項)として取っている。これは、鈴木(1972 : 110)がいう生理現象に属するものであるから、前項のデ格名詞が、原因としていちばん解釈されやすい環境である。また、山梨(1994 10号 : 105)では、(20)の例を挙げて具格性の度合は、「a から c にいくに従って、低くなる」と述べている。

- (20) a. バーナーで ローソクを溶かす。
b. 火で ローソクを溶かす。
c. 熱で ローソクを溶かす。

確かに氏の指摘どおり、具格性が異なっている。しかし、(20) c のような具格性の低い場合でも、「熱デ」が原因格になることは考えられない。それは、「溶カス」という他動詞には主体（文中に出ていない誰か）の意志・意図が感じられるからであろう。ところが、興味深いことに、(20)を(21)のような自動詞文に変えると、a は「バーナー」というものの具象性のせいか、やや落ち着かないが、b c の「火デ」「熱デ」ともに原因格と解釈される。

- (21) a. バーナーで ローソクが溶ける。
b. 火で ローソクが溶ける。
c. 熱で ローソクが溶ける。

「Nナノデ」との比較を前提に、以上述べて来た諸氏の主張を、一つの仮説としてまとめておく。

(22) 《デ格名詞が原因格と解釈されうる条件》

述語動詞：〈1〉 自然・生理・社会現象などを表わす

〈2〉 一意性

デ格名詞：一具象性 + 内在的な力

3.3 物理的因果関係と論理的因果関係

前節で「Nデ」が原因格と解釈される場合、どういう意味特徴を手がかりにすることができるかを見てきたが、今度、「Nナノデ」の方を見てみよう。

前にも触れたことだが、「ノデ」節の典型は用言に接続する用法である。「ノデ」が接続助詞と分類される理由もここにあると言えるであろう。表層の「ノデ」節内に主語名詞が現れなくても、深層のレベルでは、それが存在すると考えられるのが普通である。したがって、「ノデ」節全体を「S(文・命題)+ノデ」という構造を持つと見ることができる。なお、「Nナノデ」も接続助詞「ノデ」の一つの変形として考えたい。一方、原因格の「Nデ」は、「N(名詞)+デ(格助詞)」という構造からなり、陳述性はほとんど感じられない。次の(23)で「ノデ」節から「Nナノデ」への変形を見ることができる。

- (23) a. 低い声なので、何をいっているのかもわからなかった。(『剣客商売』池波正太郎)
b. 声が低いので、何をいっているのかもわからなかった。

例文(23)の二文は、意味的に全く同値である。そして a の「低イ声ナノデ」は b の「声

「ガ低イノデ」から来たものと考えられるのではないかと思う。つまり、まず「声ガ低イ」という「S」から、「低イ声」という「NP(名詞句)」へと変形し、次に形態論的な接続規則に従い、「ノデ」が「ナノデ」になると考える。また、この「S⇒NP」の変形において、「S」本来の陳述性がいくらか保たれていると考えるべきである。(23) a 文で、原因とされる焦点は「声」という名詞にでなく、「低イ」という部分に絞られていると感じられるであろう。

もう一度原因格の「Nデ」と、接続助詞からなった「N(P)ナノデ」を比較してみよう。

- (24) a. 雨で 崖が崩れる。
b. ??雨なので 崖が崩れる。
c. 熱で ローソクが溶ける。(=(21) c)
d. ??熱なので ローソクが溶ける。

(24)の a と c のデ格名詞「雨」「熱」は、それぞれ「崖が崩れる」「ローソクが溶ける」という現象・変化を引き起こす直接の原因である。そういう因果関係を仮に「物理的因果関係」と呼ぼう。この物理的因果関係の原因として使われるのは、普通 a c のような「Nデ」である。(24) b d のように、「Nナノデ」の形にすると、かなり不自然な表現になる。ところが、次の(25)の各文を見れば分かるように、「N(P)ナノデ」は、ここで述べた直接の原因とは違う因果関係を表わす。

- (25) a. いつもなら行きつけの有楽町の店にはいるのですが、その日は雨なので、近い日比谷のはじめてのコーヒー店にはいりました。(『点と線』松本清張)
b. 麻布のえち十と云う寄席へ行かないかとみんなを誘うけれど、私は雨なので断って早く家に帰る。(『放浪記』林芙美子)
c. まだほんとうの子どもなので、彼女は「男」と云う者に疑いの眼を向けようとしない。(『痴人の愛』谷崎潤一郎)
d. 吾一はそういう人の子どもなので、彼にはなんか特別のしたしみがあつた。(『路傍の石』山本有三)

(25) a b の「雨ナノデ」も、普通、原因を表わすと言われるが、前述した(24) a c の「雨デ 崖ガ崩レル」「熱デ ローソクガ溶ケル」のような物理的因果関係の直接の原因とは本質的に異なるものである。この「Nナノデ」は、主体が判断・思考などをした上で、文末で示した動作を取る理由を表わすものである。このような因果関係を仮に論理的因果関係と呼ぶ。ここの因果関係の論理的な根拠は「雨」というモノではなく、「雨ガ降ル」とい

う「S」から来た「雨ダ」という短縮形式と見るべきであろう。なお、(25) c d の場合は、前述の(23) a の「低イ声」と全く同じように、原因・理由として考える焦点は、「子ども」にではなく、「子ども」の修飾語「マダ」「ソウイウヒトノ」に向けられるのである。

因みに、不自然な文としてきた(26) a c も、(26) b d のように、「スゴイ」という連体修飾成分を入れれば、完全によい文になる。この場合も、原因・理由の焦点は、やはり「スゴイ」に向けられる。その「スゴサ」に基づいて、判断、思考などをした上で、後項の「崖ガ崩レル」「ローソクガ溶ケル」に関連付けるのだから、これも論理的因果関係と考えざるを得ない。当然ながら、(26) b d の「N(P)ナノデ」は、それぞれ「雨ガスゴイノデ」「熱ガスゴイノデ」と全く同値である。

- (26) a. ??雨なので 崖が崩れる。(=(24) b)
- b. すごい雨なので 崖が崩れる。
- c. ??熱なので ローソクが溶ける。(=(24) d)
- d. すごい熱なので ローソクが溶ける。

以上述べてきたように、「Nデ」と「Nナノデ」は統語的には異なったレベルのものが、《原因・理由》という既成概念にとらわれ、唯名論的に考えるから、ついその統語的な違いを見失ってしまうのである。より厳密な術語の工夫ができれば、外国語教育の場で、学習者の不必要な混同を防ぐ一助になると思う。

4 おわりに

以上、学習者からの質問をまとめて得た問題点を、本稿の課題として見てきたもので、筆者なりに問題の原点を想定し、そこだけを考えることにしてきた。そのため、問題点と直接関連がなさそうな部分や一般論を省かざるを得なかった。デ格全般の用法の説明が本稿の目的ではないからである。

デ格名詞が主体の付帯状況と解釈される条件として、状態性という意味特徴を中心に考えたのだが、それが「Nデイル」にもつながっている。この二つを同一の問題として処理することもできるだろうが、「Nデアル」との対応も考慮に入れ、別個の問題として考えることにしたのである。

原因・理由などを表わずデ格は、様々な格解釈の手がかりがあり、学習者にとって、ある程度慣れれば、それほど難しい問題でもないように思う。ただ、「Nデ」という原因デ

格と「N(P)ナノデ」との混同は、複雑に入り込んでいる問題である。そこで、《物理的因果関係》と《論理的因果関係》という概念を設け、この二形式の本質的な違いを見てきた。

なお、次のような決まった形の重複形式にも「デ」が現われるが、特異な用法というべきであろう。

- (27) a 私は私で、母屋の見まわりで、手はなせませんでしょう。(『砂の女』阿部公房)
- b 高いなら高いで天井に近いほど高く、低いなら床のすぐ上ほどの低さであるべきなのだ。(『若き数学者のアメリカ』藤原正彦)
- c それまでの私は、酒がなければないで、何日も平気で過ごせた。(『一瞬の夏』沢木耕太郎)
- d うちのママったら、何でも楽しんじゃう人だから、買物にでかけたらでかけたで、二時間くらい帰って来ないの。(『太郎物語』曾野綾子)

ここの「デ」の格解釈や統語的制限については、更なる考察を要すると思うので、本稿で試みなかったのだが、一つの問題提起として挙げておきたい。

【注】

- (1) 『大辞林 第2版』(三省堂)による。
- (2) 次の a の「～テ」節と b の「～ナガラ」節は付帯状況を表すと考えられる。
- a. 彼女は笑って、あいさつした。
- b. 彼女は笑いながら、あいさつした。
- (3) その他、次の a のいわゆる「タリ」活用の「ト」や b の引用の「ト」も「ダ」の連用形だと考えている。
- a. 隊伍整然と行進する。
- b. 「今日は行かない」と云つてみた。
- (4) 逆接を示す「ソレダイナガラ」「ソレダイテ」などにも「イル」と関連があると思われるが、この場合、有生名詞という制限が適用できない。このような接続詞化したものは、例外的な存在と考えるべきであろう。
- (5) 格助詞には多かれ少なかれ、そういった透明性がある。詳しいことは国広(1962)。

- (6) 山梨(1993)が原因格のプロトタイプとして挙げたデ格名詞の意味素性は、具象性、内在的力の他に、「離脱不可能」「手で操作不可能」「コントロール不可能」の三つが更に加わる。具格と原因格のプロトタイプを二つの直感的な対極として考える場合、後の三つは、さしあたって、問題にしなくてもよさそうである。また、述語動詞の意志性を考慮に入れ、次のような意味特徴の組み合わせで、この二種類の格解釈ができると思う。

具 格：＋具象性　－内在的な力　＋動詞の意志性

原因格：－具象性　＋内在的な力　－動詞の意志性

- (7) 森田は「ガスで死んだ」をさらに二種類に分ける。デが原因を表すのは事故で死んだ場合だけである。自殺で死んだのなら、そのデは手段を表すと主張している。つまり、「死ぬ」という動詞の意志性の有無をも問題にするのである。もちろん、山梨(1993)の例文の「ガン」は、意図的に死ぬ手段として取りうるものではないから、動詞の意志性が関与しなくなる。

【参考文献】

- 国広哲弥 1962 「日本語格助詞の意義素試論」『島根大学論集』12号
- 佐野真樹 1997 「ダケとデ、および場所格の具格化について」『日本語学』16巻5号
- 城田 俊 1993 「文法格と副詞格」『日本語の格をめぐる』くろしお出版
- 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 田中章夫 1977 「助詞(3)」『岩波講座 日本語7 文法Ⅱ』岩波書店
- 田中茂範 1998 「助詞の操作子機能——「に」と「で」」『言語』27巻5号 大修館書店
- 寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 時枝誠記 1978 『日本語文法 口語篇』岩波書店
- 仁田義雄 1993 『日本語の格を求めて』くろしお出版
- 三上 章 1963 『日本語の構文』くろしお出版
- 1972 『現代語法序説』くろしお出版
- 森田良行 1980 『基礎日本語 2』角川書店
- 山梨正明 1993 「格の複合スキーマモデル——格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」『日本語の格をめぐる』くろしお出版
- 1994 「日常言語の認知格モデル 1～12」『言語』23巻1-12号 大修館書店